

私はバイカルチャー（二つの文化）の中で育った。父の仕事の都合で5歳で渡米。5年ほど滞在し、10歳で一旦日本に帰国。その後、14～15歳の間、英国で過ごした。帰国後、多少の逆カルチャーショックを経験したものの、まだ年齢も低かったせいアメリカ社会に順応したように、日本社会にも順応した。私はこの経験を経て幸運にも二つの視点を獲得した。と同時に、自分の感覚を共有できない多少の疎外感も背負うことになった。そして、そこから人や文化の間に立つことに自分のアイデンティティーを見いだすようになった。

アートの領域で日英翻訳・通訳に携わるようになってからおそらくもう6年程経つ。現在は Art Translators Collective というアートに特化した翻訳・通訳団体の共同ディレクターとして、また東京芸術祭の人材育成プログラム APAF のコミュニケーションデザインディレクターとして、インターカルチュラルなコミュニケーション環境の向上にも取り組んでいる。この仕事に辿り着いたのは成り行きだったが、今でも続けているのは、二つの言語世界を公然と行き来することができるからだろう。

しかし、この仕事をやればやるほど不思議でしようがないことがある。それは、トランスレーション（ここでは翻訳も通訳も包含する言葉として用いる）を介した対話方法の異質さである。例えば通訳の場合、相手の話者がいるのだが、その人と直接話すことはない。代わりに、その隣にいる（多くの場合相手の話者には似ても似つかない）別の人間（通訳者）と伝言ゲームのような状態で、コミュニケーションを取らなくてはならない。仕事としてやっていることではあるものの、冷静になって考えてみるとそれはとても変だと思う。そしてまた、それがあたかも当然のように受け入れられている様子を目の当たりにすると、私の中での謎がさらに深まっていく。

トランスレーションという行為は、ある種の虚構である。そこでは、人と人の間に、別の存在（通訳者や翻訳者）が介入しているのだが、その人がコミュニケーションを多少なりとも操作していることは決して自覚されてはいけない。舞台と同様に、第四の壁は壊されてはならないのだ。通訳者にしばしば課せられるルールは「黒子のように存在を消す」ことである。そこでは通訳としての「私」は一旦ないものとされる。「正直あんまり同意できないけどこの人はどうやら、〇〇とやっているようです。たぶん……。」などという話し方をする通訳はまずいない。こんな話し方をしたら、おそらく反感を買うか、笑いが起こるかのどちらかだろう。こうした反応が起こるのは、上述のルールが確実に存在していることの証拠でもある。

存在しないはずの、トランスレーションの舞台裏には実にさまざまな力学が作用している。通訳・翻訳作業はしばし、完全な複製作業として捉えられし、もちろんトランスレーターはできるだけ正確に情報を翻訳することに徹する。しかし究極的には、トランスレーターが自分の身体を容れ物として、ろ過装置として、他者の発話を引き受けている以上、少なからず本人の固有性——経験値、知識、視座など——がそこからわずかでも染み出すことは絶対にないと断言できるだろうか。通訳者の場合は、当人の立ち振る舞い、表情、声色、ジェスチャーまでがトランスレーションの一部として受容される。そんな時、「完全な複製」などあり得るのだろうか？ 例えば、トランスレーションの暗黙のルールを演劇に当てはめた場合、オフィーリアを演じてきた数々の俳優たちの演技が全て同じでなくてははいけなくなる。しかし、実際には舞台上で描かれるオフィーリアは十人十色だろう。おそらくひとりひとりが自分の身体を通してオフィーリアのある一面を切り取り、それを顕現さ

せることをやっているはずだ。それは演技が失敗しているとは見なされない。単にそこには複数のオフィーリアに纏わる現実が提示されることになる。トランスレーションにも同じことがなぜ言えないのだろうか？

また発話者と通訳者の間でも、当然さまざまな力関係が発露される。通訳者は二つの言語を操り、そこから二つの視点を得ているという意味では、有意な立場にも立たされている。（コミュニケーションに、私のようなアメリカ発音で話す通訳者が介在する場合、そこには西洋中心主義の影響も少なからず作用してくるだろう）。話者は、基本的には、相手の反応から汲み取る以外には翻訳の質を知る術を持っていない。その時、話者は不安に駆られる。最初は不信感も持つかもしれない。ではそこからいかに心を開いてもらい、本人が持っている視座や文脈を共有してもらおうのか。（トランスレーターは機械ではない。言葉の裏にある文脈を知った上でのみ良い仕事ができる。言葉というものは状況と文脈によってさまざまな意味を持ちうる。）。また通訳者は、周囲が良く見える分、行き違いや摩擦がどこで起こっているのかも良くわかる。そんな時、通訳者は介入すべきなのか？ これは倫理的な問題にもなってくる。攻撃的な言葉はそのまま通訳すべきなのか？ 誰かが言葉で傷つけられている現場をただ黙って見過すべきなのか。介入するのならどこまで介入するのか。特定の誰かの肩を持ち、対立を増長させるのではなく、どう中立な存在でいられるか。その場その場で、通訳者は言語以外のこんな問題も突きつけられる。

このようにトランスレーターの行為者性（エージェンシー）というものは否応なく存在すると同時に、トランスレーターは話者に寄生する形でしか存在しえないという、いかにも矛盾した存在である。この捻れた「個」のあり方とは一体何を意味するのだろうか。トランスレーションという虚構を観客の前で解体し、この舞台裏のからくりを暴いた時に、一体何が見えてくるのだろうか。（それを舞台上のパフォーマンスとして提示するというある意味自己再帰的なアプローチにもとても惹かれる）。

このプロジェクトの私のモチベーションは、ないことにされている通訳者の「私」、しかし確実にそこに存在してしまっている「私」、しかしまた他者がいない限り成立し得ない通訳者としての「私」の葛藤から来ているのかもしれない。それは、自分を演じることを長年やってきたニコラの「私」の葛藤と鏡のように呼応するものがある。複製を拒む「私」と、複製を通して存在しようとする「私」。それぞれの境界線はどのように交渉されていくのだろうか。